



小樽港を外海の荒波から守る防波堤は大きく分けて三つある。このうち、北防波堤が明治時代、国内初の長大堤防として11年がかりで造られ、商都・小樽の繁栄の足がかりになったという大きな業績は、意外と知られていない。100年以上経た今もその機能に少しもゆるぎなく、当時の輝かしい成果を伝える第一級の遺産となっている。

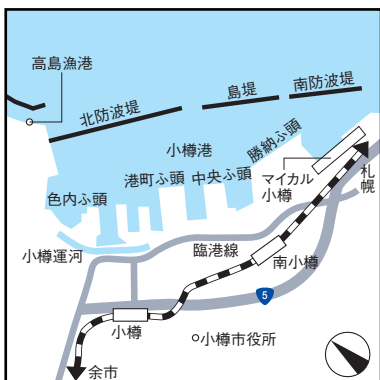
北防波堤の建設が始まったのは1897（明治30）年。当時、小樽港は石炭の積み出しと水産物の輸送で重要性が増し、外国貿易の拠点も視野に入れられていた。だが、波浪によって荷役作業は苦難を強いられ、船の沈没も起きていた。このため、旧北海道庁は国の威信をかけて防波堤建設を決め、小樽築港事務所の初代所長に後に「港湾工学の父」と呼ばれた広井勇・工学博士（1862～1928）に白羽の矢を立てた。

広井博士は高知県生まれ。東京外国語学校で学んだ後、札幌農学校2期生となり、新渡戸稲造、内村鑑三らと研さんを積み、卒業後、米国へ留学。橋造りに関するテキストは世界トップクラスの専門書と称賛された。広井博士は頑丈で耐久性の高い防波堤を目指したが、本州の防波堤建設はコンクリートブロックが海中でひび割れるなど相次いで失敗していたため、ヒントを海外に求めた。

セイロン（現スリランカ）のコロンボ港防波堤建設を参考に、ブロックを斜めに積み、脱落を防

## Data

建設：明治41年完成 総延長：1141m



●お問合せ先  
小樽市港湾部

Tel.0134-23-1107

ぐとともに隣接するブロック同士が相互にもたれあい、波力を分散させる画期的な工法を取り入れた。コンクリートに火山灰を配合して耐久性を高め1908（明治41）年、1289メートルの北防波堤が完成した。

この間、広井博士の心は休まることなく、暴風の日、防波堤が崩れていたら自決しようと拳銃を懐にしのばせていたエピソードが伝えられる。

広井博士の後を継いだ伊藤長右衛門・第2代所長は陸上でコンクリート製の大型の箱「ケーソン」を造り、斜路で海に滑り落とす方法を考案。反対側の南防波堤と中央の島防波堤を手がけた。

日本の防波堤建設の試金石となった北防波堤を命をかけて完成させた広井博士の志と、それに伴う工法は、明治人の気概と優秀な技術の証しとして今も生き続けている。

や風俗、人々の暮らしが目に浮かぶほど丹念に描写されている。

蜂谷さんは「人が国家をどう支えていくかを考えながら執筆した。小樽港を題材に書きたいことは、まだ数多くあります」と意欲を燃やしている。

## まちづくりと遺産

### 臨海公園など施設整備進む

小樽市港湾部のまとめによると、01年度の小樽港の貨物取扱量は2330万トンにのぼり、市は港湾関連施設の整備を順次進めている。港に近接して、かつない臨海公園（1万2800平方メートル）運河公園（7762平方メートル）築港臨海公園（1万2663平方メートル）があり、市民や観光客が憩う。

小樽港の歴史を知るには小樽開発建設部の小樽港湾建設事務所に隣接する「おたるみなと資料館」（築港2の2）が最適。港の推移を写真や文献、ビデオで紹介、ケーソンの模型、コンクリートのテストピースの実物、工具類など貴重な資料が多い。